

## はしがき

日本と中国は、本来、政治、経済のあらゆる面においてお互いに協力すべき東アジアの近隣同士であるにもかかわらず、両者の軋みのみが最近は目につく。「日中友好」という古びたスローガンが、むしろむなしさを掻き立てる。尖閣諸島（釣魚島）や歴史教科書、首相の靖国神社参拝など政治レベルの問題が新聞やテレビで盛んに報じられている。また、民間レベルでもさまざまな事件が取り上げられている。中国での反日デモや日本製品の不買運動など、まだ記憶に新しい。中国人が引き起こしたとされる犯罪事件なども次々と報道される。双方の間の摩擦はやむことがないかのようである。些細な出来事であっても、メディアによって必要以上に煽られ、傷口の痛みが増したり、痛みがようやく癒えても、新たな傷が痛み出すといった状態が繰り返されているのである。

こうしたお互いにとってけっしてプラスになるとはいえない状況を変えるためには、日中間の外交チャンネルというよりも、むしろ1人ひとりの相互理解が必要となってくる。お互いの理解不足をまず認識し、どうしたら理解し合えるのか真剣に考えなければならない、という課題に直面しているのである。その課題に向き合うためには、双方の歴史を踏まえた上で、お互いの意識や文化を理解することから始めなければならないのではないだろうか。

歴史を振り返ると、日本は中国から多くのものを学び吸収してきた。本研究が分析の対象として取り上げている暦もその1つである。だが、その中国から輸入された暦が日本でまったく同じような考え方の下に使われたわけではない。そこには文化変容のダイナミズムが現れている。暦に反映されている両者に共通する考え方と、日本独自の解釈から見えてくる双方の差。この両方を理解することが、相互理解への端緒とならないだろうか。本研究は、こうした考え方の下になされたものである。

いまだに欧米との比較研究が多い異文化コミュニケーション分野において、本研究の日本と中国の時間意識の差がどこからきているのかを暦と機械時計の歴史からみていくというアプローチは、ユニークなものといえる。したがって、今回の研究が、当分野における新たな視点とアプローチの提示となることを願っている。

当モノグラフは、筆者が中国人の若手研究者である鄭偉とここ数年共同で行ってきた研究のいわば集大成である。このようにまとまった形で発表する機会を与えてくださったことに対し、国際基督教大学社会科学研究所、特に、所長の植田隆子先生にこの場をお借りして感謝の意を表したい。

2005年11月

池田 理知子